

遅れずに中耕・培土作業を行い、 増収を図りましょう！

5月下旬から6月上旬は概ね天候に恵まれ、耕起・播種作業は順調に進み、5月下旬に播種した圃場では苗立ちも概ね良好です。この先1か月は平年と同様の降水量が見込まれているので、晴れ間を見て遅れずに中耕培土を実施し、大豆の生育量確保と雑草防除を図りましょう。

1. 中耕培土のポイント

中耕培土には、①雑草の抑制、②土壌の排水性・通気性確保、③大豆の根域拡大、④大豆の倒伏防止といった効果があります。

以下のように遅れずに2回の中耕培土を行います。

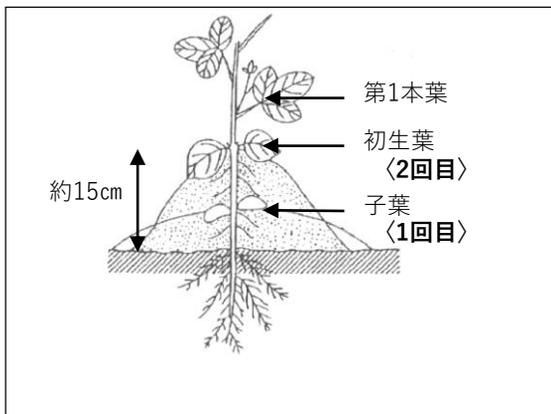


図1 中耕培土の方法

1回目 本葉3葉期頃（6月下～7月上旬）

- 土壌処理剤の効果持続期間(処理後2～3週間)以降に実施する。
- 子葉節まで軽く培土する。

2回目 本葉6～7葉期頃（7月中下旬）

- 初生葉節まで培土。株元を凹ませない。
→培土の高さは15cmが目安。
- 開花前までに作業を終える。
→やむを得ず作業が遅れる場合は葉や根を痛めないように慎重に作業。
- 追肥する場合、緩効性肥料を用いる。
→LPコート70で窒素成分6～8kg/10a施用。

表 培土期追肥の効果

区 (培土期追肥)	追肥N量 (kg/10a)	百粒重 (g)	子実重 (kg/10a)
なし	0.0	23.9	321 (100)
LP70	7.5	25.0	388 (121)
硫安	7.5	24.6	357 (111)

品種:スズコタ 基肥N量:2.5kg/10a。

子実中の()の数字は「なし区」対比。

(S61 山形農試)

★排水対策をきっちりと

図2のように明渠や排水口のつながりを確認し、圃場内に停滞水が発生しないようにする。

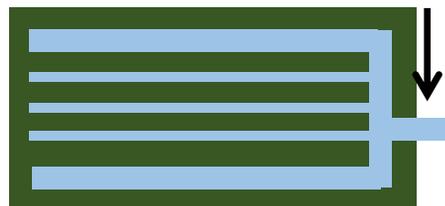


図2 明渠と排水口のつながり

2. 雑草防除

中耕培土による雑草防除を基本とし、雑草の発生量や草種に合わせて除草剤を選定し、雑草が大きくなならないうちに使用します。

使用方法が畝間処理・雑草茎葉散布のみの剤は、大豆の茎葉に掛かると薬害を生じするため、専用ノズル等を使用します。

主な除草剤の使用法

除草剤名 (本剤の使用回数)	適用雑草	使用方法	使用時期	10a当たりの使用量	
				薬量	散布液量
ワンサイドP乳剤 (1回)	一年生イネ科 雑草(スズメノカタビラを 除く)	雑草 茎葉散布 または 全面散布	雑草生育期 (イネ科雑草の3~5葉期、 収穫60日前まで)	75 ~100ml	通常散布： 50~100ℓ 少量散布： 25~50ℓ
ポルト フロアブル (1回)			雑草生育期 (イネ科雑草の3~10葉期、 収穫30日前まで)	200 ~300ml	
大豆バサグラン 液剤(ナトリウム塩) (1回)	一年生雑草 (イネ科を除く)		だいたいの2葉期~開花前 (雑草の生育初期~6葉期) 但し、収穫45日前まで	100 ~150ml	100ℓ
			だいたいの生育期 (雑草の生育初期~6葉期) 但し、収穫45日前まで	300 ~500ml	
バスタ 液剤 (3回以内)	一年生雑草	畦間処理 雑草 茎葉散布	収穫28日前まで 畦間処理：雑草生育期 株間処理：だいたいの本葉5葉期 以降、雑草生育期	300 ~500ml	100 ~150ℓ

※必ず農薬のラベル等を確認し、使用方法を遵守する。

★難防除雑草について

アレチウリや帰化アサガオ類等の防除が難しい雑草の発生が散見されます。発生を確認したら雑草の開花・結実前に速やかに防除し、拡大を防ぎましょう。



写真 マルバアサガオ(左:幼植物、右:本葉と花)
(農研機構「診断に基づく大豆栽培改善技術導入
支援マニュアル」より抜粋)

- 本葉はハート形で濃い緑色で葉脈が目立つ。花色は青や赤紫等様々。
- つる性で大豆に絡みつきながら生育。多発すると防除が難しく、機械収穫が困難になる。
- ほ場周辺から侵入する機会が多いため、畦畔等ほ場周辺で発見したら、刈取りや、有効な茎葉処理除草剤により早急に防除する。

★畦間処理を成功させるポイント

【耕種条件】

- 圃場に凹凸がなく均平
- 排水が良好
- 条間隔が均一
- 大豆の苗立ちと初期生育が均一

【散布時の条件】

- 雑草は15cm以下の大きさ
- 無風~微風
- 水田転換畑で圃場がぬかるまないこと、又はぬかるんでも凹凸が少ないこと



<https://agrin.jp/>

新着情報をFacebookや
Twitterでお知らせします。



やまがた
アグリネット



Facebook



Twitter

